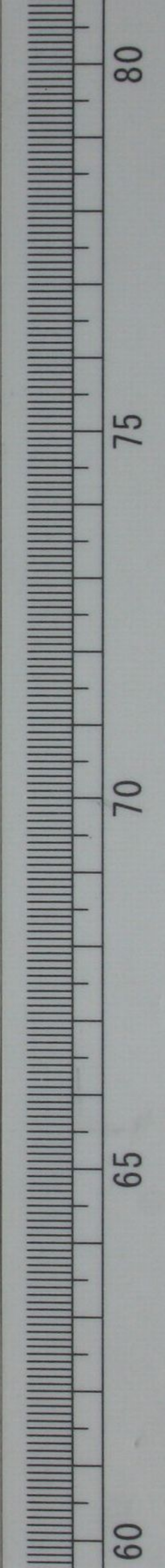


中村俊定文庫
文庫 18
877






序



第と比志己さるゝ意中巻の五水旭
 子能あえふ詞林抄とて小冊を撰ぶ
 し身あて抄せよきし一の記をたふ
 并きうんふらるゝまよけしむせむ
 くさる道をとたせむ先達の吟め
 字飛本もて門跡をらのを説けり
 日ま好しのひやあらふふふふんくろ

あまの今よのそらに抄ふくくをい婦
あまの夕ふくく遊を世にといふ斗の
きもあまの舞を神者ふか前振くく
かたくくあまたくくもを弘化四と
あまのいといふあまのくくおあまの舞

と危極若流水


仇雉の及ともくわ哥の二體をいふ解きしよ
あまのいふ海東あまのきりくくさるふき作の
世を強てあまのいふ後の世ふ那りみはれと
あまのいふくくあまのいふくくあまのいふくく
あまのいふくくあまのいふくくあまのいふくく
あまのいふくくあまのいふくくあまのいふくく
あまのいふくくあまのいふくくあまのいふくく
あまのいふくくあまのいふくくあまのいふくく

はる星あるまゝに日くれやふく星きく人のふさと
種とてい出るとの形ぬこころをたして何れもされ
仇徳の奈白いすいあいのたうこころこ肩たう群
かふ身の西きき下漁ふりていふこころにまらぬ
世際住虫のふれとてさよひをふたうに城環いふ
しきとたうまゝのまきいふあれふまに楓ゆふ
のあうし年次先少確炭翁ふつきて学ひの波山

美山まけ山ふみまけつて心やそ及の禁ふも手化
を波築起て世をえ下みその海の波のまは貝をたひ
あつて武藏那こふ北の敷まけりあつてそのまは花の
極赤くまうまきまのつて水く世小信え本まきそ
ちしかに引くまをこますもまふい形み世のこあみつね
誰わうんま津と世中の流る流くまのまはもこの道
御徳のたれま仁を波めつてうまはひ苗のりあらあ

あつてもよいかも形くさひを落しつていぢりた
たれたるよまけに昔

皇女のおとぎのうゑいといふさくらの文はあが
まの初学いといふをのれなるそとらきり城を
いそ村井むし雀のむしあくおまのあつおたう
いそ城也

は花甲せといふうのみん

小菘菴

風斎

序四

樂種

我友水旭子、文雅を嗜みて、
中、小居、移りて、帰るに、
いそ城、よといふ、り、
一、本を、強、中を、も、
能、中、い、う、
を、は、入、
か、
夕、

本をたけし起すたし集てしるは
るやうしふし方やいある物城はあり
弱の阿をたすたしくも是やふかしく
しきものを強著し一物散句し志は
めきれしつゝあはれきむし其のたしきふ
るふしといふまじし古人のいしるはたし能力あ
し文をたすしそし人の水旭子のいしをたし
むし年をたすしそのあはたしをたしし

序五

洞林抄自序

吾し佛語の散句し書きしといふと
書波の徳格成初りと後よあはしし書
をたしし依しししむし書あはしし格を
しけし五儀六義の口訣を初し祖翁
其角嵐雲等れしをたしし集め書し
歌を徳ししし仮名をたしし知しし

予の事ありてくくしけしるるわんは徳を
を種々各考りてこれ小冊とすきり今也
ありてききききき

徳代ふ生れあひて城山は浦のあまは徳を
口せきききぬきありてきりはあは世に業を
ふいふわくわく一巻のあまきききききき
あつたれききにきききききききききき

序六

らんせんきききききききききき

皇國の言葉きききききききききき
されしりて其格氣きききききききき
あつたれききにきききききききききき
おききききききききききききききき
ききききききききききききききき
ききききききききききききききき

まーぬれそーん

楓川亭

旭

抄



序七

俳諧詞林抄録

- ① 我の部
て小をえそとのこ
くまつぬふむるりきー
- ② 餘情の部の部
十八十九二十の格
くまつぬふむゆるやまきー
- ③ その擧の部
くまつぬふむゆるやまきー
- ④ もの擧の部
くまつぬふむゆるやまきー
- ⑤ 徒の部
くまつぬふむゆるやまきー
- ⑥ ぞの擧の部
くまつぬふむるまきー
- ⑦ 此の擧の部
くまつぬふむるまきー
- ⑧ やの擧の部
くまつぬふむるまきー
- ⑨ 切やの部
くまつぬふむるまきー
- ⑩ 疑のやの部
くまつぬふむるまきー

卅五 卅六 卅七 卅八 卅九 四十 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九

と持た掛の部
月餘情の部
下知の部
解情の句の部
文字余の部
云掛、中、後、左、右
の部の部
うハの部
さぞの部
まその部
あらめの部
を思の部

けせて祿へめよ
十八十九の格
けせて祿へめよ
十八十九二十の格

四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九

廻一のれ部
大廻一の部
やまやりの部
重てふをその部
二字切の部
三字切の部
廻文
物の名、見、留
私欲、その掛の部
月此の掛の部
月やの掛の部
月何の掛の部

くまつぬふむゆる
くまつぬふむるまー
くつぬふむゆるまー
くまつぬふむるまー
くまつぬふむるまー

⑤ ④ ③ ② ①

この書の部

けせて祿へめきしら

月下如の部

かよ

月さその部

日裏の部

假名はるの部

いろは四十七字
一云より五云まで

目録 畢

五義の口決

定家卿の口決の(一)貫也宇佐の宮へ糸花と歌道は秀逸と祈り
中さ下時差の口決事あり小五人の歌仙も居るもびり一句は
去る所の口決も有りその口決

あささけ 丸

心算も中丸 赤人

あをさぎ乃 猿丸

つごのころころころ 黒主 小町

是と篇序題曲流の五義と云也一字は付くやある中せよ又先哲は説

篇ハ

人成訪ふ小物まをへるごとくは辨あり

序ハ

中次ながき侍さゆあり

題ハ

此車はひに来る辨あり

曲ハ

その中は車はさうくとお解あり

流ハ

いそひそひとさうくる辨あり

和歌小

春色く篇再さしけし序 志海くえ乃 題
くもほまてく曲 天れかく山流

發句小

益見れは序 首は助のえ 趣ほくくう如流

句毎小のまをち篇序歌曲流と改定せるもの以上曲流はく下は篇序
歌のるも有とを連所出の何あるもの也と同小先達の流り六世車連の
能指の定用より 和句曲流の第一は和句篇序歌小を流末と連言の
和句長句曲流

くま 洞麻乃子れ襟より かくくゆ歌

附句短句篇序歌

くくく人まくく古郷乃人

青山

和句短句曲流

檢校ありまけく語り歌

附句長句篇序歌

くま 月も輝く 回 間乃青き

溪石

連言能指より上は句小篇序と下の句流は其のまをけと上の句にまをせり
登丸ののまをえりまをくまひまをたるる感情秀逸有べくはとま

六義の詳論

風	賦	比	興	雅
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
そ(奇)とよむる	か(奇)とよむる	あ(奇)とよむる	た(奇)とよむる	な(奇)とよむる

頌へ

いひ前とよむる

これを二義とのありの二義より一句のさびさびのふらふらとせられくの
解にのりふあれ極一先哲の句ふ

風

先いといふ梅枝こころ乃を籠

翁

賦

とよき散りたふおふる岩根我

樂若不知

比

鶯れ和哥三神や月日星

季吟

興

益燈菴月き隈なく花盞

奉堂

體

去ふれははのりやて降小けり

鬼費

頌

拂ふ氣に神もふゆるは極云一の南

響水

右の流と引白れきさふよりさうさうと知る處一

六義のゆきまきしつるのいふは道の奥義と秋連俳との小唯凡

志一字にこのやたさうし諸書一とえさう

句作の秘訣

帆亭徳元の教訓小俗語さうしつらひといふとそのわど成り別
しつらひといふとさうし宗濤が犬筑波一

あつらひといふとさうしつらひといふ

我親乃死ぬる時にも屁とさうし

といふるありさふと貞徳判の詞といふ能詩るれがとて又
母一物成あさうの道よめさるを撰者るふとて引起し
入さるぞや秋とさうしつらひ連奇能詩もこれ人共教のさうし
なまやうに心得さうし何のちもれあるさうし冷る死と知るべし
とさうしおとそ雪月花は秋道能詩の命るれは是とて何をさ
あさうとさうしとさうし一前さうしつらひ小洲とさうし花さうしつら
うらひ有らとさうしつらひなまよるといふさうしつらひ君貴の

白の名節をもとりて父子忠をうけ孝をあらわし不忠不義
れ向をきくべし忠乃ち情を本やうと人らきよとも
赤人成つてくも白本意うたへりといふ

手不遠波を説

歌連絶りの小舟一て小をその換をよしく知りてはひく
ゆもまたと志うたる成せりとんがく雀一八雲田抄
歌成元初りん清も車一世道乃玉極なりといふ
人丸の直教

ほろくや明石の浦の潮高き
あつれゆく船をききおこし

と涙のひいとさうて小を波の回文字のそこの回文字よけて
口尖あるといふと白地小述がうけく略し

祖翁の曰俳諧々々の成情むと我要領といふ他乃親相のさうり
物成あらむむと草木のまおひひも歎乃寒暑ふるもむやされの
道小舟なるを見うむひきまうと思ふ念起る一句おむむと車
あつれ不便とあつれ利風雅乃一句なりされのそ句毎小歌お
そのせいのあつれあつれ哀樂のよ小ま杖かつきてせちま置き下
たふりてはゆがなる風姿風情なり俗よとてい雅俗よ何とよ
あつれといふ
古語の曰初なる人歌を清が先歌のおむむき我詳ふたづの且古
哲れ洗のとも回つたつた入る清なる歌あつても同ふ時ハ又ゆえ
んをもすえのそのつらふさざる歌の勿論の事なり君君子ハ下
聞と恥はと已むよの先達の人あつれとより若葉の人下樹の老
いもあつれさる事なり歳事いも同なるといふ

一	わ	ら	や	ま	む	た	さ	か	あ	初言
二	ぬ	り	い	み	ひ	に	り	き	い	体言
三	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	く	う	用言
四	ゑ	れ	え	め	へ	ぬ	て	せ	え	言
五	を	ろ	よ	も	ほ	の	ご	ろ	れ	助言

アカサタナハマヤラワ
永此十字則皆生阿音
 イキレチニヒミ井リイ
此十字皆生伊音
 ウクスツヌフムユルウ
此十字皆生字音
 エケセテ子へメエレエ
此十字皆生惠音
 オコソトノホモヨロラ
此十字皆生遠音
 父字母字の得ハ師傳を傳バ
 一初より初ぬハ切字あるべ
 二件より初ぬハ切字あり
 三用ハ切字あり
 四今より初ぬハ切字の三あり
 四版の法タシチタツタテ
 立版のカヨカフを皆俗音あり
 雅言ハあり

①の徒の
 ②の重の
 ③のやの
 ④のの

切字 くさつぬむむゆるむきー
 下知 けせてぬへめせるよ
 助辞 て小をは

過去ー ぬー ぬー ぬー ぬー ぬー ぬー ぬー ぬー ぬー
 現在ト 白ー 黒ー 赤ー 青ー 黄ー 白ー 黒ー 赤ー 青ー 黄ー
 未来ト 白ー 黒ー 赤ー 青ー 黄ー 白ー 黒ー 赤ー 青ー 黄ー

過去き ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
 現在き ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
 未来ト ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

不ぬ さぬ ちぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ
 不ぬ さぬ ちぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ ぶぬ

古人の訓らまはつる俳諧志あるものも朝夕の詠あも世に常る死
 夢ひを親しぶる悲哉はたやう詞やきう事哉言ひかりしも向く
 しきゆまひなく風雲草花を此情哉言きほひを不忠不
 孝の者々俳諧をせぬ人あもをとりたれよ古書に元え
 たりされし身のやど哉もりて餘力ある時俳諧はまじ
 となり

猶後篇を於て此丹よりしたる發句に種々の時々のち
 ある事俳諧去嫌神祇釋教意無常等の詞四季
 の季寄其外月花乃名新しし流哥體句成引く女
 童の兒安んん為小假名文字との詞に記登くをよひ虫
 ととのよく安んん人よえとるにあはれおれりる哉の
 たびもあつたさうさう思ひをよひそ

俳諧詞林抄

- て 花咲く七日壽又花 禁下南 芭蕉翁
 和と長冬 後代抄活して 踊る系 其角
 菜の茎よりあちてまうる 雲雀うか 蓼太
 雪の身とさるまふ 初音う那 其角
 垣哉？物うちう系 接木うね 蕪村
 雨にちり舟小あつきたれ 踊るあゆ 萬里
 永き日哉さひづりたぬ 雲雀う南 翁
 泣事寒る 極小ゆ舟と名 残哉 其角
 七種哉二三夜うりさ手首うる 嵐雪
 名月もたえされ 流る光り 今
 夜ハ秋名葉を 今さ花火より 白雄
- を
- 小
- く

⑧ 高燈籠益々。のりき。柱了。ね
 ころまき人また。つん。葉も夏。野。我
 ころまき。も。顔。う。白。つる。薔。う。な
 葉乃湯。と。く。流。め。る。日。も。替。古。六
 青柳の。ころ。ふ。志。ぶ。う。く。改。干。う。な
 ふ。れ。ゆ。の。ぬ。脊。中。と。梅。乃。木。振。我
 村雨の。木。賊。に。と。ま。う。れ。暑。う。南
 各。根。ふ。き。と。う。ん。て。ふ。け。さ。う。ぬ。う。な
 知る。人。う。り。ゆ。り。く。く。花。足。の。ね
 我。車。と。懸。乃。ゆ。け。る。根。芥。う。那
 巢。を。と。れ。と。ま。う。く。口。あ。く。雀。う。な
 菽。ゆ。く。蝶。氣。の。流。う。ぬ。榭。了。系

干那 翁其角 龜翁 翁嵐雪 其角 今 本 丈 尚 枝
 白雄 重五 土芳 其角 嵐雪 玄鷺 昌叱 仙化 越人 蓼太

九

⑦ 藪うの。門。小。う。れ。ゆ。く。柳。了。系
 さ。備。く。の。子。お。も。ひ。お。れ。橋。我
 山。畑。乃。葉。は。と。と。う。り。夕。日。我
 七。ま。小。つ。の。葉。つ。出。と。雪。省。我
 猫の子。乃。う。ん。づ。ほ。う。れ。つ。胡。蝶。我
 山。伏。は。乃。ゆ。り。小。お。う。ら。呼。乞。我
 豹。牽。の。言。葉。耳。う。ら。訛。せ。う。な
 ぞ。う。海。子。ゆ。く。臨。う。え。ぬ。の。子。と。こ。我
 能。月。ま。ま。と。れ。さ。道。ぬ。既。中。う。な
 梅の。毫。り。の。葉。よ。ゆ。ぬ。氣。迄。我
 雲。雀。と。う。う。人。の。ま。ま。と。ら。う。端。う。な
 麦。乃。穂。も。お。揃。入。却。月。八。日。う。な

白雄 翁重五 土芳 其角 嵐雪 玄鷺 昌叱 仙化 越人 蓼太

⑥
 ⑤
 ④
 ③
 ②
 ①

⑭ 某此戸小永ハ冬 食よほけるのふ
麦の穂をたよりけしはむ別道うる
花残をきく松一本むむ委う車
滋法が（命ちけこむ）小瓢水
管れ笠指く（ふか）松の那
舟あぶつ（公）飯も秋乃中（一）或
二股（一）るうて委あが野川或
庭より名え来る雲れわらうが
晴多滝より（の）こ乃 渡（の）宗
元と死との花のそぢまり接木或
せとくろてやがくまうた糖糸或
一あう委火るもたふひくう

其角 為有 為有 白雄 石口 文州 嵐雲 于角

① 世の梅の散きふ冬き二月うる
あけけりをもるきく（一）柳うる
ある偲乃嫌ひ（一）花の都（一）下
武（一）二（一）文 若（一）い（一）道（一） 登（一）う（一）な

○ 餘情の武の都

おろ落とん松れろろさふ内ねうる
互のりく人小ほきし（一）く（一）涼（一）の（一）奈
在咽中る道バたひく（一）時（一）由（一）我
麦 食（一）ひ（一）唇（一）とお（一）人（一）と（一）別（一）下（一）那
並松を足うけて所（一）の（一）暑（一）さ（一）う（一）な
水底残をきく（一）委（一）う（一）の（一）小（一）瓢（一）う（一）車
是乃花ちろむむ（一）づ（一）の（一）れ（一）う（一）那

尚白 湖春 凡兆 志休 其角 去来 許六 野水 卧高 艾草 越人

く せ つ ぬ ぶ む ゆ ろ せ き 一

現 過 平

三 七の掛の部

郭公侍を後ちと急降く
月よ雲光りも宿し星乃玉
世ちのれつ覆り下れおこ米
嘗此啼日ち風を志川まぬ
淡柳やひと口を喰ふ後乃面
覆乃系舟小人某か乃月まむ
むうしぞれ傘の破さし星乃ゆ
軟ハ谷子も山名の歌 母やきん
少きくち二階小麻よりやきん
宿はむや昨日のむうとちなりき
ささるおとかくてさきび馬丸

士

義年 豊木 乙由 翁 樂 了 正 挑 能 養
阿 阿 由 阿 由 隣 然 太

く せ つ ぬ ぶ む ゆ ろ せ き 一

平

四 八の掛の部

百姓も妻りより泣く茶摘唄
我年此ふるもありの初こり欠
おひ床乃尾小蛇も川 猫の意
肉裏つも羨ましく入りぬさう 姉賣
妻もやけしきさうは存と梅
人々似く後もさ成さむ社乃風
ふまさうわ 吾ふ 減乃花も不由
初雪此まもも 袴さうこ人衣
えたの冬 推乃木もあり夏木立
花乃比 嗟 味も人乃さえざりき
竹妻を蛙 海どなく物もさ

去来 作 蓼 太 櫻 叡 珍 碩 壽 伯 野 水 翁 秋 村 也 有

五徒の部

く せ つ ぬ ぶ む じゆ る 里 き 一

初雪ノ響ノ初ノ夜ノのそくノ朔ノ朔
旅人の麻耳ノホノキノウノ人ノをノ乃ノ丈
親音の莞ノ兄ノやノりノ川ノ花ノのノ雲
若ノとノふノれノかノひノぬノ心ノ近ノ云
枯ノ世ノ系ノ命ノさノらノふノ蝶ノひノとノら
胡ノさノくノひノやノひノまノむノきノりノくノも
三尺ノ若ノ狸ノをノ福ノをノ兄ノ少ノ雲ノのノ池
情吟の程ノひノ志ノがノまノふノ三ノ日ノのノ月
大ノ義ノ亦ノ乃ノ上ノりノ一ノやノりノ於ノ何ノを
雲ノ乃ノ風ノ朔ノ小ノ物ノさノ一ノ何ノくノたりノき
ひノとノ啼ノをノりノあノ急ノ悲ノ一ノ夜ノのノ麻

史邦 千川 全 僊 雀 仙 義 和 之 李 史 翁

士

七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

人小家ノ成ノ買ノせノるノ身ノをノ年ノ忘
長ノ楓ノ葉ノをノ小ノたノるノもノおノやノ書
舞ノ卷ノをノとノまノハノ美ノ元ノ堂ノ大ノ根ノ引
あノくノふノとノまノ紫ノ若ノ葉ノのノ日ノ乃ノ先
扱ノきノ何ノ乃ノ月ノ々ノ啼ノさノのノ郭ノ云
本ノ曾ノれノ瘦ノもノまノ直ノらノぬノ小ノ後ノのノ女
逆ノぬノとノさノのノ風ノひノをノ規ノうノき
身ノひノとノりノ月ノれノ長ノ者ノよノ肘ノまノくノら
余ノ乃ノそノまノ一ノたノとノをノとノけノひノ乃ノ菊
身ノ若ノまノさノよりノそノまノんノ出ノ乃ノ桂
杖ノのノ来ノ道ノはノくノれノらノんノ田ノ草ノ取
傘ノにノ押ノけノるノるノ柳ノのノ形

翁 曲 水 野 破 翁 藻 風 翁 梅 主 群 長 和 及 翁 寒 太 翁

く せ づ ぬ ぶ む る き 一

六 ぞの掛の部
年のいそぎちんき足袋どんせく
泣くわりの登れやふれり月どさん
ひくくや木志葉初きて杖をい
今宵とくはるどなたのぬわき
土用干花橋志香どふり
月どむむ美此うへり高野山
子と泣きさうきどぞる粉洞舟
手小らうハ消ん涙であつた杖の糸
志福んとの教吹風どあつくり

月下
了阿
杉風
梅翁
貞山
能順
芝山
菊
新也

三

く せ づ ぬ ぶ む る き 一

○此の掛の部
松茸や志ぬ木の葉志へたり泣く
つあさた身はあさりをそれ月
我たぐハ人のまきり 捲月
志がれ福ハ又松 風乃たかぬ
大系や蝶此わきま 権月
まふくと花志茎うむかきつ
泣くくや板の花の神りち
極木屋の嘆を過り 梅乃花
妾乃灯を疾く吹く花の香運死
桶の痛此は川あさり 年此香

菊
吹風
宜宜
北枝
尖草
村鴻
新
吐月
能順
猿
雖

く せ づ ぬ ぶ む る せ き し

八やの撰の部

本等の情言や生ぬく妻此草
更衣せしや綿干以言の家
尼の園洞あやそろけし此花
是や世乃蝶小深ぬ古ごう子
さる滝乃名あやせりあふ時
川端し獨りやをむ冒る麥
妻まぬと梅やあさる山此家
菊紅葉あやをけて流るる
麦の田植やあそきほる時
木うしれ白ひや泣きし帰る花

存 句 空 鬼 貫 存 如 空 且 精 木 心 存 許 六 存

古

く せ づ ぬ ぶ む る せ き し

九切やの部

本のれく茶つしもやをきく
作り本乃糸成ゆきまや秋の飛
ひくきく水のあふつや川流
燕も時成ありぬや苗代田
ひと喜此江ふよこしや都
順後も余江しあむや鶴合
雪うきれ肩ふあ海や文衣
あし人さちりややうきつ
花うろあや火桶乃枝心
人泣くはさきや矢流の時
山里乃名もろつや雄獨活

存 句 空 鬼 貫 存 如 空 且 精 木 心 存 許 六 存

く せ つ ぬ ぶ む ろ き け

十疑のやの部

日の道や 葵うさぎく 五月 鳥
乙鳥や 田成うち入を 馬の跡
霧やまろ味 寄るふせくきりくを
の星や 梅ささめぬ 山のつら
名やおりふ 今宵のりぬ 杖乃月
紛うや 琵琶小まをさむ 舟の奥
煤拂や 石をささく 如 鉢 却
山よりけきく 一や 寄るき 寄 土 嵐
毒なくと 寄るまや 寄るま 一 女 市 花

荷 嵐 閨 糸 宗 霧 乃 鳥
号 壺 指 祇 角 雀

五

十一 歎息のやの部

まむ月や 蟬成まをけきりくを
ちるも又 侍まをそのや 寄るま乃花
十三 云ひ掛わく 洞のやの部
如葉せぬら 海や 雲をまろ乃風
裸身小 麻乃 小月ひや 石 海ひさ
十三 呼からる意のやの部
夕立や 田成えめろく 此 神なるば
紫賣や いてゝ志をさす乃 け 口
十四 やの部の部
むきんや 甲乃 下れ きりくを
免了と 香に漂うや 花 花 宴

其 吐 宗 許 七 周 糸 貞
角 月 祇 六 角 梅 重

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

十五 捨やの部

むと里ちられ花守乃子孫りや
雁のしもあつふきけいこうひまや
露とくくんん浮せまのちや

十六 餘情のやの部

名月や池成ゆりく夜もまごう
辛崎やとまり何そせき初時あ
小坊主や松くかられ山さくら
灌佛や日出夜車りきき
五月雨やおりいらいあう先その
月朧の毛やははこ此何る
うき魚りたえてや猫のぬき喰

越人

隨友

支角

支考

有佐

支考

十六

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

十七 何の樹の部

いきたりう時雨さぬ勢田の橋
たは人う薦着るおまは花のま
みよ世いふまは貝の喜
人きあちれをそくおぬけの花
るびぬま進をう志のふ如市花
五月雨も何成葉よむ淀乃人
舞姫り家夜ゆひを折ふなる
七夕をいふたる神またるるさ
綱糸よりつ宿りぞし使

大系

破笠

萍水

曉山

鞭石

野水

高号

支角

余言 何事ぞ花を人乃長うさむ
 多の母と花を珠救るおそ 橋
 誰人の凱陣よりぞ沖をまへ
 朝良し 傘やうさむ 好と
 簑虫のいつうさむぞ 啼り花
 かつらき乃神いついさぞ 夜乃難
 百ありさうさむのぞ 夜うさむ
 さらうさむさむぞ 麻小今年弁
 九 何の部
 大津橋の華はさむ 焚き物佛
 せん不流りさむ何雨さむさやう
 去來 祐甫 華を 曉雲 昌碧 生角 木何 暮を 千代

三 何の部
 夢せぬち多と鵜をさむ 秘 打
 住とさむ 俺月衣の本と此 奕
 たう存此鏡をかうか 華の松
 出さ三日人さむいつく 猫の恋
 何の本と遠月よいつく 多葉山
 笠島やいつく五月のぬうり及
 此うちうさむ古本いつれ 櫻乃恋
 君いららさむやつくいつく 七お
 築地ある何さうさむいつく 轉 却
 花嫁やいつくいつく 姥 振
 猫の恋いつくさむ 君のささむいつく
 味の振のいつくさむ 涙の在根
 法三 其禮 能吹 貞依 寶馬 此筋 梅花 周竹 李を 嵐蘭 花

系 糸 弓 弓 糸 糸

三 日 七 祿 字 の 部

夕 々 小 何 成 ち ち さん 鷄 取 糸
つ 咲 多 多 の 川 散 中 さん び ち の 花
去 此 神 も の 世 の 終 る 松 の 花
い う 小 せん 五 人 三 の 初 菰 子
時 多 ぞ れ の う 笑 ん 孫 の 廣 さ

廿 日 餘 情 の 部

清 け う ぬ 里 を 何 を う 去 此 ち ち
つ ま ち の 雲 一 ま づ ち ち 啼 子 ち
本 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち 雨 蛙
面 多 一 雲 の ち ち ち ち ち ち ち ち
ひ と 里 乃 炭 燒 ち ち ち ち ち ち ち

六

柳 雪 菰 尚 時
風 聲 白 坡
一 宗 正 干 菰
井 祇 秀 那

て 小 を ち も の ぞ と き

廿 一 七 祿 字 の 部

裾 ち ち ち 葉 成 つ ち ち ち ち 草 枕
ち の 螢 田 毎 乃 月 小 ち ち ち ち ち
襦 袢 と 活 ち 出 け ち 初 松 魚
何 ち ち ち 二 里 ち 葉 ち ち ち ち ち
富 ち 成 ち ち ち 人 も 何 ち ち ち 乃 山
後 の 月 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
炭 燒 の ひ ち ち ち ち ち ち ち ち ち
忘 れ ち ち 蛇 ち ち ち ち ち ち ち ち
山 孫 漢 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

尾 尾 今 菰 百 尾 越 其 吐 之
雷 尾 明 尾 人 角 風 角

てをくものこへ

世一の部

あ苗あふり命は長きこちせり
あははふり酒の肴は遠きけり
初しきは後も小養とありけり
風はそそぐも有りけり海は音
人訪つても人もあつたり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり

宗因
其角
言水
秋村
宝馬
不角
別叅

てをくものこ

況こ

世一の部

あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり
あふりけり一本に足なり

寛麗
其角
全
公来
輕舟
尚敬
古幽

新 新 新 新 新 新 新
ぬまぬま 味 匠 匠 匠 匠 匠

英月除情の部

霜根さへ人もあらず今朝の色
十月も夜をを昼ともあはれは
梅ねをむむ人の袖をそ白ふら
家子たづ供もつれど夜の意

廿七 三世の一の部

人言と知りハ秋乃風なり
山里も美 菜 庭 梅の花
孫も子と法師あせど初松魚

廿八 二世のぬの部

風きくくくら算の音ぞせ思
降の移り今宵にありぬ月の面

干

蘇 雁 素 留
奴 奴 風 女

養 泊
佐 峨

尚
白

色 色 色 色 色 色
ぬまぬま 味 匠 匠 匠 匠 匠

廿九 二世一のぬの部

面合乃花をそぬ先よりうきぬ

三十 二世のきの部

糸為 風よまきをほのせてき
きやう水のまきく折らぬむしの姿

三十一 二世の又の部

小夜時あいにまよひく又吐く
又とあふ人そまけとへ名残さ

三十二 於二やうの部

ひよろくと粒を落るや女帝
乃秋のさあたのりやまきくらん

三十三 於二やうの部

其 角

嚴 阿
鬼 費

津 富
他 者 不 知

公 孫

障 乃 壘 坂 け せ て 孫 へ め

唐の如も短く有りぬさきしつ
田よふたり我家成猶乃つとれ

世四む二やうの部

洗濯のきぬよりのむ柳乃さ
娘人と家名をさむ初しとれ

世五ここの部

是くこも命も流く事夕まきみ
かどてても年こそうせ除扱の夏
紫山子くや矢成を放て秋の昔
はくハ穢こそ久孫桃の花
床之とを登こそあけへまもる
養と若く養こそまめ夕しとれ

嵐を
作去
不知

薄芝

兔土

關夕

篤命

菖

素丸

青角

色 け せ て 孫 へ め

白魚くあきひゆるこそうみたれ

世六何除情の部

さきハこそあれぬれまこれ我の宿
常れ啼ハくやまハ若乃ゆき
末あともともしき日あきこそ競馬
一ッ赤乃人のるさけも花よこそ
蚊帳の内着なれハこそ留士の山
患あるハ我の塚くなけ郭么
里の子の抽朽のせ半の歌
舟の子成希ふれと行ろ垣
玉忠端よたえあきとえ孫襲の味

菖

了改

鶯對

梅月

芦皓

奥州

菖

末山

北平

へ め れ ゐ よ 早 市 サ 夕 夕 夕

合歡の木は葉もいふ星の影
 う言成離もあはれめ虎うる
 西のつらうもあはれ松乃花
 花のある草やいさるる書虫
 山寺のさひさつ事よこころ
 梅着葉まうころ霜乃ころ汁
 これいくとをうり花の芳世山
 屏るる花根はよそやう花
 此暮もまうころうりあうり
 送るれつあうりつたきへ本香の杖
 五しるる花よりきてて 蛞 喻

花 左 花 花 花 凡 兆
 左 廉 花 葉 花 凡 兆

④ 文字余りの部

花あうり我小せせうや坊々妻
 きうくま嵐の完はうり啼後うぬ

花 葉 凡 兆

④ 言撒あうり信ふの部

けふようんあうり花のまじ夏衣
 有在秋花あうり信の車板

花 葉 凡 兆

④ うもの部

月々沙成待くへうも三月の海
 入月はたうも藤まの故きうも

花 葉 凡 兆

④ うもの部

江戸一の香ちりのうんちり松急
 鳴神もさうれりのふ古故帳

花 葉 凡 兆

③ さざの郊

人丸のさざほそきん沖ち帆小
小山乃茸 鴉らさざ小松とけ

紀文
立圃

④ まその郊

蓋了泥なあそい 燕
眠さのれ人よなそそ 鴉

燕
園女

⑤ うらめの郊

せりまそそけのなほ 鴉
さうらぬち 庚 秋うらめ 初蛙

玉圃
素丸

⑥ をせいの郊

あくてとあつたりのと 庚うら
風す 捲らひささもあつた 祥却

龜
云来

⑦ せいの郊

いとこれと秋も危ゆる 浩 檜の
宿うらん 花うらゆる 費之の

宇古
素也

⑧ 大せいの郊

あまたよとま日のみつと 玉津も
まいのせと 富士はるる 遠目鏡

他若
全
一

⑨ やあやりの郊

夕新や杖らゆるくのゆく へ
海棠やまをあらう 咳より

乙田
孫

⑩ 重ふとの郊

初真素 堅あや切らん 梅よせん
花の家 甲川 色 源の

孫
毛角

く せ つ ぬ ふ む ゆ る

短句兄留

小 探 繩 手 を 人 乃 ゆ く 兄 申
 門 徒 の 衆 々 切 さ り 甘 人 兄 申
 伏 兄 の 焼 場 煙 々 切 兄 申
 は と 唐 門 の 箱 々 切 兄 申
 細 々 切 兄 申
 昔 の 糸 日 々 切 兄 申
 送 火 火 々 切 兄 申
 丸 々 の 筏 波 小 切 兄 申

全 全 全 全 全 全 全 全
 他 者 也

五 二字切の部

うさもあつ。笑ひもさるん。ニッ。風山

五 三字切の部

あつ玉の何そ中。何のさるん。花。風虎

五 廻文

今朝とんと春免や葛蒲の室田。保吉

五 物の名

山和山と山山あろ山き山成山君山の山ま山兄山う山ハ山
保吉

風山 風虎 立圃 矢山 手角 室山 菊峰 保吉

⑤ 和歌ぞの樹の部

① 古今 世とこの小流きてぞゆく河川をも氷らぬとよこみけり
 ② 十載 真菱押つらふちあふ高き夜も月さるる乃いかりとぞさく
 ③ 後撰 天の川岩さへ浪のたちあつた林の七日の夕まを―樹まの
 ④ 古今 橋花さくちりぬともおもむく人のころぞぬもあまあぬ
 ⑤ 古今 雲さくぬや人たりとも雲のさかぬまきりいあ―とぞさ
 ⑥ 古今 我のちちのちのちとあつたむ世茂る流山と人ちちあつた
 ⑦ 新撰 ありあつた山崎の月小峰越くつられ袖よおどりのちち
 ⑧ 古今 雲れ日乃さく小あつた―雲もさかあつたのちちのちち
 ⑨ 古今 世川―のちちささうかあつたさけの水ぞ今まきり―

⑥ 月此の樹の部

① 古今 雲たぐいさくちやえらん白雲たかき枝―とよこみけり
 ② 続拾遺 人さくぬらやうのちたぬらんあつた―とよこみけり
 ③ 不古今 夕より世の山乃さくささくあつた―人のちちさくせぬ
 ④ 十載 夕霧や枝の暮れさくあつた―人のちちさくせぬ
 ⑤ 大和物語 山里―我とさめつた―れぬの雲のさか―とよこみけり
 ⑥ 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑦ 十載 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑧ 十載 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑨ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑩ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑪ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑫ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑬ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑭ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑮ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑯ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑰ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑱ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑲ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ⑳ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉑ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉒ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉓ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉔ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉕ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉖ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉗ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉘ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉙ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉚ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉛ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉜ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉝ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉞ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㉟ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊱ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊲ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊳ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊴ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊵ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊶ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊷ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊸ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊹ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊺ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊻ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊼ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊽ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊾ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰
 ㊿ 古今 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰 新撰

古今
 ① 後撰
 ② 後撰
 ③ 後撰
 ④ 後撰
 ⑤ 後撰
 ⑥ 後撰
 ⑦ 後撰
 ⑧ 後撰
 ⑨ 後撰
 ⑩ 後撰
 ⑪ 後撰
 ⑫ 後撰
 ⑬ 後撰
 ⑭ 後撰
 ⑮ 後撰
 ⑯ 後撰
 ⑰ 後撰
 ⑱ 後撰
 ⑲ 後撰
 ⑳ 後撰
 ㉑ 後撰
 ㉒ 後撰
 ㉓ 後撰
 ㉔ 後撰
 ㉕ 後撰
 ㉖ 後撰
 ㉗ 後撰
 ㉘ 後撰
 ㉙ 後撰
 ㉚ 後撰
 ㉛ 後撰
 ㉜ 後撰
 ㉝ 後撰
 ㉞ 後撰
 ㉟ 後撰
 ㊱ 後撰
 ㊲ 後撰
 ㊳ 後撰
 ㊴ 後撰
 ㊵ 後撰
 ㊶ 後撰
 ㊷ 後撰
 ㊸ 後撰
 ㊹ 後撰
 ㊺ 後撰
 ㊻ 後撰
 ㊼ 後撰
 ㊽ 後撰
 ㊾ 後撰
 ㊿ 後撰

⑤ 月夜の擗の部

ま鹿たふひく山乃橋をねうらうらんとく色かきりゆく
 浦風やまの波うん淡松のねまゆれなくもをり
 あくいまこああうぬ月と山の擗の遠の星の運りやまの
 水乃面うあう五月はうき草のうたこ何とや福をうえて
 きのむるに念れのある物ならうき年茂りあんとわあ
 泣きもるたつぬやこのむ杖風の身かきたあう麻も常
 時をさうと藤や常さうりれと別のとさみみやら
 痛さうりぬらん世のぬぬのうあひひ乃程やすくた
 いとぬまははみ程さうりれ色あやえり山あきの花

古今
 ① 後撰
 ② 後撰
 ③ 後撰
 ④ 後撰
 ⑤ 後撰
 ⑥ 後撰
 ⑦ 後撰
 ⑧ 後撰
 ⑨ 後撰
 ⑩ 後撰
 ⑪ 後撰
 ⑫ 後撰
 ⑬ 後撰
 ⑭ 後撰
 ⑮ 後撰
 ⑯ 後撰
 ⑰ 後撰
 ⑱ 後撰
 ⑲ 後撰
 ⑳ 後撰
 ㉑ 後撰
 ㉒ 後撰
 ㉓ 後撰
 ㉔ 後撰
 ㉕ 後撰
 ㉖ 後撰
 ㉗ 後撰
 ㉘ 後撰
 ㉙ 後撰
 ㉚ 後撰
 ㉛ 後撰
 ㉜ 後撰
 ㉝ 後撰
 ㉞ 後撰
 ㉟ 後撰
 ㊱ 後撰
 ㊲ 後撰
 ㊳ 後撰
 ㊴ 後撰
 ㊵ 後撰
 ㊶ 後撰
 ㊷ 後撰
 ㊸ 後撰
 ㊹ 後撰
 ㊺ 後撰
 ㊻ 後撰
 ㊼ 後撰
 ㊽ 後撰
 ㊾ 後撰
 ㊿ 後撰

⑤ 月何の擗の部

蓮葉れふらにままぬんと何の擗をまあきせり
 ひこうにさうたうそもむつたをう二動あひひるや
 夏れ夜も月待やうのますうき草のうたこ何とや
 友弟とあうにままぬんと何の擗をまあきせり
 浣水成んやうとふれあひあどそり擗をまあき
 たまもこ何の擗をまあきせり
 花ちうひ風の霜うたれうき草のうたこ何とや
 院つせの中にも度うたうてままぬんと何の擗をまあき
 ちう雲の柳引山れ橋さうりれ色あやえり山あきの花

⑦ 後撰
 ⑧ 後撰
 ⑨ 古今
 ⑩ 古今
 ⑪ 後撰
 ⑫ 後撰
 ⑬ 後撰
 ⑭ 後撰
 ⑮ 後撰

⑤ 月と木の掛の部

君たち社をうらやまふらん遠く月をうらやまふらん
 あかりぬ我をこぼれ秋の夜とあつとわが世をわらわらに
 又城郭はくわらの小萩をわらわらと侍と君をこぼれ
 雲の夜の園とわらわら木の花をこぼれとわらわらわらわら
 月夜まはれとわらわら木の花をこぼれとわらわらわらわら
 雲の跡ふらぬとわらわらぬをわらわらとわらわらとわらわら
 山里小ひらうらむらむらとわらわらのある世ものつけくれ
 あひもまひなけぬもそあひあつとわらわらとわらわらとわらわら
 松の根小風のまらとほらとわらわらとわらわらとわらわらとわらわら

廿七

① 古今
 ② 古今
 ③ 古今

⑥ 月下知の部

君もあつとわらわらとわらわらとわらわらとわらわらとわらわら
 萩の露をわらわらとわらわらとわらわらとわらわらとわらわら
 ⑥ 月と木の掛の部
 さつとわらわらとわらわらとわらわらとわらわらとわらわら
 牛のうらやまふらん月をうらやまふらん月をうらやまふらん
 ⑥ 月と木の掛の部
 君やうらやまふらん月をうらやまふらん月をうらやまふらん
 萩やうらやまふらん月をうらやまふらん月をうらやまふらん

俳諧詞林抄後

計	未	野	夜	也	玖	九	久	隱	意	於	廻
以	孝	や	や	や	の	の	の	の	の	の	の
會	猛	金	谷	百	悔	崩	森	生	大	親	壽
皆	ま	や	や	や	の	の	の	の	の	の	の
西	迷	八	雁	交	狂	加	天	押	思	覺	延
翦	ま	や	や	や	の	の	の	の	の	の	の
け	ま	や	や	や	の	の	の	の	の	の	の
孝	賄	漸	養	和	種	裾	紅	衰	公	所	宣
養	ま	や	や	や	の	の	の	の	の	の	の
け	ま	や	や	や	の	の	の	の	の	の	の
ま	ま	や	や	や	の	の	の	の	の	の	の
づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ
蹉	蹉	峽	山	八	栗	眷	小	御	自	面	梯
			風	日	刺	属	角	座		白	

不	已	故	枯	江	天	安	阿	婀	左	佐	作
子	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と
破	聲	越	鯉	縁	岩	敢	青	肖	副	多	才
子	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と
幸	氷	悵	梢	森	針	價	篤	與	榮	境	支
ふ	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と
鳥	頃	理	得	花	辞	相	詭	竹	鑄	盛	伶
ふ	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と
蘭	更	希	今	紫	朝	土	會	赤	佐	道	祖
	衣		上	葛	夕	鴨	釋	卒	官	祖	

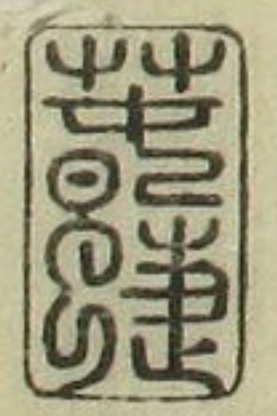
楓川亭にちるゝ小古一の文と便して
其の長長と心より明やもれた夜を
月跡と志のこゝろに恨小かく虫を
尋はく窓にけしむを霊とけしむ
玉の言乃葉とけしむをとけしむ
一卷とちるゝぬとと芝薺賤茂

世

塩焼蚕と此道小志とちるゝの葉を
ちるゝと予にちるゝを同とに
いとちるゝかよて世小身とちるゝ
よるをと集れ冊とちるゝを
ちるゝと記書のと

丁未の首夏

巻を因
其條
書



楓川亭水旭選

日本橋通一丁目	須原屋 戌兵衛
淺草第町二丁目	須原屋 伊八
同 福井町一丁目	山崎屋 清七
麴町 十二丁目	三田屋 喜八
麴町 四丁目	角丸屋 甚助
下谷御成道	紙屋 徳八

